

E-14 家庭内の団らんを中心とした家族の同一生活行動の考察(第3報)

—小学生のいる家族の朝食・夕食について—

千葉大教育 大町淑子

目的 家庭内で、家族がともに過ごす団らんの実態を、生活の時間帯や内容からとらえるため、NHK国民生活時間調査、昭和45・50年を資料として考察してきた。今回は、小学校児童の生活実態調査から、朝食・夕食について検討する。

方法 調査時期：昭和53年7月の平日。調査対象：千葉県内の小学校8校の5・6年児童とその母親 322組。調査方法：質問紙による自記入(小学校を通して依頼、回収)

結果 1. 朝食時「家族が揃って食べた」は22.6%で、才1報の昭和50年の21.9%(7:15~7:30)に近い。最も多いのは「子どもだけで食べた」26.6%で、次は「子ども1人で食べた」20.2%となり、朝食は夕食に比べて「子どもだけ」「1人で」食べる割合が高い。「子どもと母で食べた」18.8%、「子どもと父で食べた」6.2%である。

2. 夕食時「家族が揃って食べた」は53.0%と多く、昭和50年の27.1%(19:00~19:15)を大きく上回っている。次が「子どもと母で食べた」27.8%、「子どもだけで食べた」8.9%、「子ども1人で食べた」2.7%である。

3. 朝食時の家族の同一生活行動は学校により、14.8%から42.9%と開きがあるが、東京の通勤圏といった地域性や、父の職業をどこに関連しているとみられる。

夕食時の家族の同一生活行動は、1校だけ25.0%と低い。他は40.3%から78.6%で、全体として高率である。

1人の子と父母で3人のような少人数の家族は、食事の同一生活行動が多い。拡大家族は12.4%あるが、朝食時1.3%、夕食時1.6%と同一生活行動は低くなっている。